

翻刻『風羅念仏』「みちのく」巻一・二

寺 島 徹
東海林 恒 英

暁台編の俳書『風羅念仏』の「みちのく」篇の巻一・巻三について、全文を翻刻したい。

『風羅念仏』の「みちのく」巻一は、かつて、おもに伊藤東吉氏が言及するのみで、その存在・内容は明らかにされてこなかったが、寺島徹「芭蕉百回忌追善集『風羅念仏 みちのく』について」（金城学院大学・人文学論集、二〇一九・九）において、巻一の存在と内容についてあらためて報告した。つづいて、八巻徹氏「『風羅念仏三』の発見経緯と『五十音順東臯句集』の作成について」（『東磐史学』44号）（二〇一九・九）ならびに、東海林恒英「幻の俳書『風羅念仏みちのく』の発見」（川柳宮城野869号、二〇二〇・二）において、あらたに、巻三の存在が報告された。それをもとに、寺島徹「芭蕉百回忌取越追善『風羅念仏』事業と暁台陸奥の旅」（文学・語学232号、二〇二一・八）において巻三の位置づけについて述べた。翻刻に際し、これらの文献にもとづきながら、概要をまとめておきたい。

一 風羅念仏の企画と「みちのく」巻一について

「みちのくの巻」は、長らく所在・内容とも不明であったが、『新免安喜子氏寄贈連歌俳諧書目録』（京都府立大学文学部日本・中国文学科編、平成30年）の発刊において、『風羅念仏』諸本とともに、「みち

のく」の巻も京都府立京都学・歴史館に所蔵されていることがわかった。先の目録より、書誌事項を引用しておきたい（寸法は、私に補った）。

外題、風羅念仏。半紙本一冊、袋綴。縦二二・七糎×横一五・九糎。暁台編。二十丁。天明壬寅のとし。丈芝坊序、書林、江戸室町三丁目 須原屋市兵衛／京寺町松原上 辻井吉右衛門。

巻一巻頭の白居の序には、芭蕉百回忌にあたり、暁台師は、その追善のため、脇起し歌仙を募り、全国の半分にあたる国々を縦横に行き来し、星霜にたえながら、三十三本の追善をなした。仙台は、多くが師の支流にあたるので、この時宜に応じて力を合わせるものが多く存在した。奥の細道の旅で芭蕉に染緒の草鞋をわたした画工嘉右衛門は、自らの所縁の者である（息という説が有力）ので、筆をとる、というのである。

さて、「みちのく」にいたるまでの風羅念仏の諸本について簡単に確認しておこう。これまで、風羅念仏の研究史では、東武の巻六冊、上総・安房の部一冊、そして、『みちのく』巻一冊、法会之巻の半紙本による都合九冊が確認されてきた。伊藤東吉氏は戦前に、『みちのく』一冊を閲していたが、その後、清水孝之氏は、未見としており、行方がしれなかった。だが、冒頭で述べたように、近年、巻一、巻三が相次いで発見されたのである。

『みちのく』巻一は、丈芝の序文と辻井吉右衛門の刊記もみえ、題簽に、巻数もとくに明示されず、一瞥するところ一冊で完結しているようにみえる。他の奥羽の旅に関する冊子は、「京撰編」などとともに、未完におわつたと想定されてきたようだが、そのように考えたとき、歌仙においては、二巻をおさめるに過ぎない巻一をみるかぎり、奥州行脚の成果が乏しいという印象を受ける。暁台が天明元年（一七八一）から天明二年にかけて奉財を募るにあたり江戸を中心にしていたとはいえ、東部篇六冊の充実ぶり、そして明和七年（一七七〇）の自身の『二編しをり萩』奥羽部分の盛況ぶりと比べても、違和感があったのである。

二 『風羅念仏 みちのく』巻三について

さきの白居の序より、「みちのく」の企画の概要がしれるのであるが、「みちのく」巻一からは、その全容をうかがうことができなかった。

しかし、八巻氏が旧仙台領東磐井郡藤沢町（現一関市）の旧家から題簽の欠けた「みちのく」を発見し、二〇一九年頃、東海林に、内容の特定を依頼された。題簽の完備された同一本を所蔵する渋谷和邦氏の助力もあり、これが、「みちのく」の巻三であることがわかった。この経緯は、前出の「幻の俳書『風羅念仏みちのく』の発見」に詳しい。この、あらたな「みちのく」巻三の出現によって、「みちのく」全体の構成が、かなり把握できるようになったのである。本稿では渋谷氏蔵本をもとにしたい。書誌を簡潔に示したい。

半紙本一冊。薄藍色、布目紋。四一丁、題簽「みちのく 三」（原題簽）。縦二一・六糎、横一五・七糎。刊記なし。

本書の出現から、少なくとも巻二が存在していたことがわかる。な

お、板下に関しては、脇起しの部分と地元俳人の発句の部とは、別筆のようである。つぎに巻三の構成を示そう。

内容は、丈芝坊白居の松島風屋庵社中が中心であるが、明和七年（一七七〇）の『二編しをり萩』で暁台が訪問した俳人たち、名取郡増田の栄山・完似、志田郡古川・麦雨、宮城郡高城・百馬、柴田郡大河原・也彦など古参俳人の顔がみえ、当時の結社もみられる。『みちのく』巻一が、丈芝ら風屋庵の歌仙一卷、蘭峨らを中心とした福嶋浅香連中の歌仙一卷を収めるだけだったのに比べ、巻三では、暁台一座の七歌仙を中心に九巻を数える。『二編しをり萩』は、名所をもとに、結社ごとに歌仙の一順を載せていた。『みちのく』巻三（そして『みちのく』巻一も）は、脇起歌仙をもとにしている。

また、この旅の行程についても、明らかになっていた巻一に巻三をあわせみることでより鮮明となる。清水孝之氏が不明としたルートについて、江戸（天明元年秋季、同二年春）↓奥州（同二年五月七月）↓北越（同二年七月）↓帰庵・伊勢（同二年八月）↓江戸・房総・奥州（九月以降）という経路が想定でき、今回の『みちのく』巻三の出現により、天明二年年秋、冬の奥州行脚の様子も明確となる。『みちのく』巻三における、会津での「人として」の吟詠は、『蟬塚集』（露秀編、寛政十年（一七九八）の暁台に関する「後ハ越後にも契あればとて冬の冷き頃、会津ね越て別れしか」などとする記述と一致し、九月に白河を越え（遺草）、冬の奥州行脚の後、越路に向かい、年末に尾張に帰ったことが確認できるのである。

三 丈芝坊白居の役割と『みちのく』以後

先の序文にみたように、丈芝坊白居は、『みちのく』巻一、『みちのく』巻三において中心的な役割を果たしている。

丈芝の序は、卷一のみを手にとるとき、やや仰々しさを感じさせるものだったが、少なくとも卷三までを包含することを考えれば、仙台の多くの俳人が暁台を支援したという文言も妥当なものだったといえよう。

丈芝は、明和七年（一七七〇）の暁台東北行脚の折も暁台を助け、その後、安永二（一七七三）、三年に尾張に逗留したことがよく知られている。暁台を通じた蕪村との交流、その裏での伊勢、辻村逸漁との交遊も注目されるものであった。この他、近年の調査で、この時期に、丈芝が旧派であった尾張横須賀の楓京とも風交を結んでいたこともわかった。ここでは、丈芝の摺物各種が手渡されたものとみえる。なかでも、明和五年（一七六八）版の古川連中の一枚摺も渡されたものとみられ、その古川連中（麦雨、栄里、桃園ら）は、『二編しをり萩』でも、緒絶橋の条で暁台を迎えていた連中であつた。古川連中は、今回紹介した天明二年（一七八二）の『みちのく』卷三でも摺物でみられた麦雨を中心に春季発句で参加している。丈芝が媒となつて、明和期以来、暁台を支援していた奥州グループの一翼が暁台の勸進事業を支えていた様子がうかがえるのである。

このほか、東北地方の俳壇ということでも、八卷氏は、前引の論考で、『みちのく』卷三への東阜の入集の意義について述べている。当時の俳壇事情について「東山連中」のことにも触れ示唆的である。他にも、陸奥の吾友は、安永二年（一七七三）に、「みちのくの吾友に草扉をた、かれて」（『蕪村句集』）と、蕪村を訪問したこととでしられる。その吾友が、中新田連中として、芭蕉の「香を探る」歌仙の脇起俳諧を、暁台とも知己であつた斗入坊元室の脇句とともに、追加して寄せていることも目をひく。

暁台は、風羅念仏の企画に際し、芭蕉脇起しの付合、あるいは、第四ぐらいまでの素案を、あらかじめ、ある程度、懐紙・短冊などで用

意していたようだ（『新幽蘭集』卷末参照）。秋田の吉川五明も暁台と芭蕉発句の脇起しをしていることからも、その様子は確認でき、今後、卷二はもちろんのこと、卷四以降も、新たな「みちのく」伝本の出現が期待される。まだ、調査の過程とはなるが、卷一、卷三について、ここに、翻刻する所以である。

なお、今回紹介した『風羅念仏 みちのく』で多くの種がまかれた後、暁台の暮雨巷と東北地方の關係は、白居によって多くが継承され、その流れを汲む雄淵により、白居七回忌追善の『たまくじけ』（文化三年）に繋がる。ただし、岡本勝氏によれば、白居は、この当時、仙台俳壇において亜流であり、暮雨巷、枇杷園の流れは、当地において大きな勢力ではなかったという。たとえば、『みちのく』卷三にみえる仮宮は、『蕪塚集』（寛政四年自序）で鉄船と改め（渋谷和邦氏ご教示）、芭蕉の百回忌追善を企画し、丈左、道彦らと芭蕉の脇起しの追善俳諧を行っていることは留意される。

だが、暁台によって蒔かれた種は、士朗の力添えもあり、化政期にも、暁台追善の内容を含む、巢居の『於くの海集』（文化四秋序）等に繋がっていくのである。そのあたりの子細については、また、次の機会に分析することとしたい。

*

全文の翻刻にあたっては、清濁については、原本そのままとし、句読点は適宜補った。仮名遣いは原本通りとした。旧字体は新字体に、異体字は原則として通行の字体に直したが、一部原本にしたがった場合もある。改行は、丁移りは、で示し、丁数を補い（）に示した。

注

- (1) 『俳諧大辞典』（明治書院、一九五七）の「風羅念仏」の項目参照。
 (2) 清水孝之『加藤暁台―研究・鑑賞・資料』（和泉書院、一九九六）参照。

(3) 寺島徹「尾張横須賀における楓京と知柱亭・晁台・也有の交流について―白羽家所蔵資料を紹介して―」(東海近世二七号、二〇一九) 参照。

(4) 『吉川五明集 上』(秋田俳書大系、一九七四) 『遊ばかま』(天明二年) 参照。

(5) 岡本勝『近世俳壇史新攷』(桜楓社、一九八八) 所収「『おくのほそ道』後日」参照。

翻刻

(『みちのく』巻二)

風羅念仏 みちのく

(表紙)

古人なしといへる翁故人となり集／つくる事古今にわたるといひけるも今ハ／いにしへこと、なりて今其集つくれるハ／も、とせの故人を奠れる也。かの大伽藍／とりよろへる人は一木一艸たもおろかならず(1オ)とや。茲に我師晁台うし一句一行の基／立て、みつから扶桑半州を蹤横し／寒餘を凌て終に三十三本の追善を／とけらる。いさほしなる哉。此みちのく緑葉城／辺はおほく阿叟か支流にひたれハ此／時にあひてこのえらひに渴仰の力をあはす(1ウ)ものすくなからず。師いへる事あり。もときく／翁ほそ道にすちりもちりて身をよせられし／時ひと夜の下陰となりて染緒の艸鞋に／志を顕せし画工嘉右衛門ハ老人さはかりの／由縁あるをのこなりとぞ。嗚呼おほろけ／ならず。此事其事をはしめにかいつけて(2オ)／ふれてきこゆ。いかにせん老の筆禿れ口つき／ゆかみて何をかいはむ、いはさるといへる詞を／のみかいらし、白居敬して蹲る

天明壬寅のとしみちのく仙台の

菖蒲の巻

歌仙行

あやめくさ足にむすはん草鞋の緒
かくやと払ふ曙の蚊の背
土甘くあら小田ひらく松蒔て
火を焚あたり腥きなり
もと船へ水売荷ふ有明に
風つや／＼と露の上ふく
紅葉の賀遥に警固つかまつり
うすむらさきに思ひかよハす
此寺のあハれ告よや山鴉
兀うせてけり雪舟か馬
湿気降の雲吹切て其ゆふへ
星川堤合歡にさす月
手やむなくすこ／＼戻る骨牌打
もとの女房か見ぬふりを見て
古哥の蛙鳴なり裏御門
水と、まりて蕁生そむ
花守か手嶋蘆織もとかしや
又塩売と浄土あらそひ
烟とも雨ともわかぬあめの降
鶏なくかたへ舟ハよせたり
犬神をつかふと聞も此あたり
菊池に夫の恨のこりし
黒髪をつかみ三上たる夢覚て

閑人丈芝坊(2ウ)

芭蕉翁

白居

晁台

松嶋連中
百馬

投雲

橋三(3オ)

舞双

買我

秋也

化来

万郎

虹梁

野蒜連中
嶺五

艸洲(3ウ)

東肆

丞鼓

楽巾

故的

登米連中
祇目

砂斛

先游

主梅(4オ)

石巻
不国

岐阜のお山にあからひく雲

橋十

水波の声しわかれし川霧に

渡之波 峰羽

粟の中道さふらひを避

岩明

菩提所の鐘撞たてる宵月夜

萬寸

斗盞疾かれと袖を引つ、

坡芦

帟御前か泪見せぬハ猶あハれ

雄渕

むすふも苦し太刀の佩まじとり

晋車（4ウ）

上の瀬ハ石高く下ハ水広き

李明

うるかといへる腸を塩にす

丹杏

御師方の心いそきを夜とめして

莫故

曇るを春の名残なるらし

梨冠

其ひかりいや堆き花百樹

仞宮

草芳しきほそみちの吟

執筆（5オ）

四時之吟

松島風星菴連中

紅梅や月になる夜の去かたき

百馬

雪降や細く掃道はきもとり

立去て柳のおもてなかめけり

投雲

賜飢て鳥に組つくあらし哉

冬の月梢にそふてあらハる、

袖の匂ひありて台の月見哉

橘三（6オ）

けふの月江に落る鴈のくもり哉

岱尾

蚤に狂ひ身を嚼犬の哀也

買我

初汐や十分に満てしつまりし

奥人

水重く流る、霧のゆふへ哉

萬郎

しくれ来る暁の星のひかり哉

舞双

秋の蚊の目に遮て月暑し

卯雪

笠きせて子をあそハせり春の雨

渭石

おほろ月心そ花のなかはなる

湛水

荒し家の赤馬見えて冬の月

人旨（6ウ）

柳うゑて市に雨きく人ゆかし

虹梁

○ 野蒜砂星菴連中

鼠尾花の散あと暑き野中哉

嶺五

○ 松しまのいほ寝

風の星をりく菴に入夜かな

楽巾

植田水蟹の穴よりもる、哉

東肆

芦をれて川風寒きゆふへ哉

守桐

藪陰を行人見えてつはの花

豕鼓

しら濱や月も雲間に氷る夜そ

午網 故的

雪の庭興つくるまでの菴かな

艸洲（7オ）

○

牧原や此道たてる花す、き

登米 祇目

春雨に垣のむすひめほとけけり

同 砂斛

花による身を嵐かな秋の蝶

同 橘十

○

山遠く雨なす春のゆふへ哉

石卷 不国

衣かろく卯月の雨にうたれけり

角力とりつらりとならふ船場哉

同 玉梅

鴨なくや火影うすらく原屋敷

同 玉梅（7ウ）

世話に添ふ我にハ夜のさくら哉

秋たつやもの見の窓に兎ひとり

冬枯の山をふさちる鳥かな

蝶くゝの姿や風のはしり船

同 東野

秋の夜やひとり行身も鳥おとし
乗合の舟にはくれし寒哉

「(8オ)

澗水のをりく洗ふ柳哉

同 仙木

稲つまや二足三あし畦の道
寒菊や庭も東ハ咲かちぬ

竹格子ゆかしきほとや家さくら

同 白扇

松の幹風のまハるや蔦かつら
うち上る波のあやおるちとり哉

同 雪後

たよわしや蟻のくひをる董艸
語り尽て梅かゝしるき夜なる哉

同 半輪「(8ウ)

名月や算へおほせる峯の松

渡之波 峯羽

おもしろきなから野菊のあハれ也

岩明

〇 畑中につれなく花の老木かな
夕立の晴きつて降小雨哉

仙府瓠形菴連中 仞宮

よわき日の影くるひけり秋の風

仞宮

薙刀は花に品よき柄物哉

萬寸「(9オ)

秋末や里人声す峯わたり
門見ゆる道の徑の初しくれ

坡声

戸明れば梅の上より日の匂ひ
蠅ひとつ夜更て鳴や嶮の中

坡声

おもひきつて降出す雲やけさの雪

古沢や春とゝのふて苜の角

雄淵

昼かほに降しきる雨の白き哉
ふゆ白の壁に蜻蛉のひかり哉

「(9ウ)

遠霞ひとり舟はくをとこかな

莫故

日最中につれなく露の光哉
就中雪のあしたの海青し

鍬かけて引折て行や桃の花

為梁

かきつはた渡れハしつむ浮橋や
夕たちのあとに音あり海の面

東有「(10オ)

時に命嬉しやさくらさく便

完山

河豚汁してうかゝハし己か身
追風やふりかへり見れハ峰の雪

哥憐

有たけの姿を見せる柳かな

陌頭

古館やもの音とてはかんこ鳥
秋の末あさかほの花昼も見る

桑針 榎本

しくるゝや鶴も江ふちを立て行
我寢覚知て啼たかほとゝきす

同 舊房

とんほうの濡て落るや露時雨
世捨ても片手業あり洪団扇

仙府 五城房

うくひすにあるしふりして飛れたり

風星菴 白居易

湖辺に馬をと、めて
青あらし瀬田一方へ吹落ぬ
道欠て水流れつ、むらを花

山居

気色たえて紙衣に星のひかり哉

瑞巖寺の方丈に入て

花橘仏子いく世に／香をふれし

風星菴にと、まること／十有五日

松しまや果はかなしくゆふ眺

曉台

〔11才〕

全〔12才〕

医王寺の卷

歌仙行

笈も太刀も五月に飾れ昏のほり

門戸にくらくかんことり立

むら雨に百服茶の湯はしむらむ

筆とり筆を置わすれけり

日暮れハ桂の花を袖にをり

露になえたる細糸ほしかも

西の京今ハむかしの寺の秋

双六打の小銭わひつ、

明近く女いさかひさ、へかね

馬引かけし雨の赤坂

庭雀立あかりてハ輪に下りて

琴爪なけるさまのあとなき

夢解かそら言告る宵の月

水衣や、寒けなる顔

霧くさき岩の欠道寂として

芭蕉翁

蘭峨

暁台

松祖

芻古

敲雲〔13才〕

呉丈

馬弼

三保

古

祖

台

峨

丈〔13才〕

雲

椰のほそ葉の雫とくく
朝ひより花の名残のかけ簾
三日啼せて逸すうくひす
酒一斗井手の蛙と代にけり

婦さと、めて松明をゆふ

山姥の夜ハむなしき谷の声

疱瘡病しなん草むらの中

陽炎のきら／＼麥の苜蓿盛

高麗に軍ハ初りしとや

金売か分前かたる宿の主

頭巾のしめる浦の汐風

おほかた八十夜に一夜の秋の月

胡鬼の実とりに法師伴ふ

八朔に梅なき里のはや寒し

鏡ひとつに立かはり見る

ものねたき心を謎にかけられて

きのふは昨日風の白罌粟

須磨の里に十貫の家買出し

こゝろもとなき療治也けり

燭あり／＼高きに花の影のほる

松のおほろを唱ふ同音

保 弼 祖 南楚

菊明

台

峨〔14才〕

古

祖

丈

雲

保

弼

明

楚〔14才〕

峨

古

祖

丈

明

楚〔15才〕

四時之吟

信夫福嶋蝸菴連中

蘭峨

散さくら寒うなるまでまとゐけり

朝かほに雨一時のいのち哉

風痛し雪になるらむ夕月夜

添竹をかくして萩のさかりかな

程々

露の玉ちるを名のミヤ信夫摺

楚江

をしの雌の石ともならて鳴夜哉

三保

五月雨や机上に我をかへりみる

「(16才)

目に見えぬうちを柚の花の盛哉

敲雲

門を出て柳なかむる日和かな

松祖

追れてハ先へもとりつ蟋蟀

女
芹路

日の影もおほろなりけり涅槃像

菊雨

すハされは有明桜おほろけき

南楚

秋の風なけと責る歎旅の夕

呉丈

春の風鶴の撃にほふかな

馬弼

ひと、せ洛東にあそひし／夏日をおもひ出て」(16ウ)

おもひ出す若葉の艶や下涼ミ

秋日和瀬こしの魚のひかり哉

○ 瀬之上連中

小鮎飛て水を離るゝ事二三寸

岡席

笹の根にひよろりと出たり露の塔

宇翼

火とほせハ雛の坐をとふ鼠かな

寿耳

出代の五兵衛かあとの五兵衛哉

豆苗

酒さめて桜を払ふ奴かな

文席

窓鎖す夜ハしつか也かへる鷹

掛田
破甑 岩明」(17才)

霞たつ水際に日の見ゆるかな

我跡に虫の来て鳴夜寒哉

おもひかへて盗人恋すしくるゝ夜

瀬之上
吞涙

西宮春怨

本宮連中

花ちる夜おとろへそめしけハひ哉

冥々

元結に霜や置らむ後の月

「(17ウ)

春の月汀にかふ貝あらむ

大阿

す、しさや燭の火影の簾こし

秋の夜の松に更行離宮哉

鮎買ハ、女に顔や見られなん

ほそくくと雪降つたふ笈かな

不言

落かゝる鳥の古巢や冬木立

雨鹿

梅かゝや装束の間のほのくらき

一洞

いそちまで懸る子もなし秋の暮

春潮

幻の巻を見る夜のしくれ哉

兔哉」(18才)

春の水遠く照して日は入ぬ

秋夫

○ 安達小浜連中

牛牽の目遣ひ黒し橋の雪

蘭明

裸子の機嫌にあそふ団扇哉

未圭

山吹や岩にくたける水の音

花明

なま酔のよこれて来たり春雪

洗柳

草の名も七いろ八いろ雪解哉

菊露

螢火や土橋の穴の時明り

「(18ウ)

柴船をおもひきらられぬか赤蜻蛉

○ 浅香露秀

蛇の声蝶の夢さむほとそかし

○ 江刺岩谷卷連中

暁となりて常ありおほろ月

杜暁

誰をまつ橋ともあらてほとゝきす

蟪蛄の石にむかふや秋のかせ
うつふしにしハし霜夜の枕哉
頼の藪きしはしる雪解かな
三日月や跡なる鴈の影寒し
鳳仙花咲や土籠のかよひ道
寒声や夜泣の門に立とまり
梅さくや家むら出入小商人
松杉のいと長くし栗鼠の声
夕日影さたまる門の柳かな
涼しさや寝なりに下る舟の人
翌ハ又いかなるさまや秋の風
ほたくと椿散けり雨の中
雪つもる道なき里の朝寝哉
名月や山家の灯かすかなる
河骨や泥によこれて葉の乾き
南天の花に蚊の啼夜明かな
梅さくや埃吹こむあくた川
道艸や昼かほよれる夏の月
朝かほの影法師見む朝の月
水仙の花また白しけさの雪
日の筋の横たふ春の川辺哉
暮涼し早き流に馬の声
蜻蛉の果なく見えて日ハ入ぬ
明ぬれハ人里ちかし啼千鳥

「(19オ)

白帟

蝶車

蝶羅

富仙

麥明「(19ウ)

五童

蝶屋

車来

野卿

「(20オ)

白晧

白明

「(20ウ)

春雨に小高き杉のくろきかな
月に身をまかせて夏の旅路かな
朝霧の桐にはれゆくけしき哉
野路の冬唯さへわふに鳥なく

旅懐

蛸の啼はつらく古郷思ふ

かへりくれハ浅香のわさ田穂に見ゆる

晧台

全「(21オ)

書林

江戸室町三丁目／須原屋市兵衛
京寺町松原上／辻井吉右衛門

「(22オ)

「『みちのく』卷三)

風羅念仏 みちのく 卷三

(表紙)

夏艸の卷

歌仙行 東奥仙台

瓠形庵社中

風羅翁

夏艸や兵ともか夢のあと

日ハ露暑く見えわたる也
ひらくと椀物する木を打裂て

二朱判の沙汰よしと唱る

月のさす簾の陰の土器に

照葉をかけし人々の袖

苔の廟猿さつたる秋のこゑ

世々の怨や雨と降らむ

晧台

白居

北鳳

俣宮

呉鳧「(1オ)

万寸

曾外

身のさまを弁へるほとうらめしや

けふは鐘鑄の水つりに行き

ひらくと石龍トカケの木にさしのほり

陰囊フナリをひねる猿のわひしら

月にヤド捨り膝拍子なる唄きかん

秋風帽を吹落す時

それなからこほる、石榴袖にして

小家は志賀に似しあたりなる

かさくと蟹のはひ行枕もと

霞めるまでに灯のうつりさし

花にむけは花は面にしけく落

柳をつかむ三献の酔

笠嶋の巻

笠嶋はいつこ五月のぬかり道

蠅オホカガにわつらふイのほと

蠶オホカガの甲を器に水もりて

から板舗に先移りけり

有明に弱き謡の眠たさよ

連レ馬膝を折し秋の夜

櫛フふかく林の鳥の蹴あらして

鋏ヤどりに皆まかす棺

むら雨に人の心も宇治山田

懸連歌して家出する妻

摺衣ミたれて薫る夕暮に

あふきの要ぬけて飛月

たかむしろ白き芙蓉の咲あたり

芭蕉翁

外

居

宮

台

外（5才）

居

台

外

外

外

外

外

外

外

外

外

外

外

外

外

外

外

外

外

外

外

外

逢は、歎へき人に戸さして

手に持し入歯うしなふをかしくも

肥後のはつ荷を勢ふ水揚

明の星花の見越にさえかへり

かすみ遙に雲板をうつ

糊壳の皴手あハれよ桶提て

捨ふて戻すこ、る尊とき

空晴て筑摩祭のやすらかに

烏帽子なからの旅に出し人

粟喰てうき肝癩や忘るらん

みそさ、いほと能鳥もなく

香のもれて園のやり水静なり

つき添ひ行も夢こ、地にて

暁の引狼吼る松の風

拔穂さ、くる手那植の宮

月の前すらりと並びさ、ち唄

奈良稿はやる秋の涼しミ

蔵元の舟にとりのす小曲埃

三軒家にて日の七ツさく

猿の子にか、れし頬を泣はかり

東坡といへる頭巾手にもち

膳まハリ花に小寒き搔膾

柳の影の椽に入朝

武隈之巻

桜より松は二木を三月越し

拳白を思ふ雨のうつ蟬

芭蕉翁

居（6ウ）

台

射

居

平

原

台

射

外（7才）

平

居

台

射

原

平

射

台（7ウ）

居

原

平

射

台

筆（8才）

北風

茶の煙うすき板戸に色付て
 沼田五反の山買にけり
 乙の子か雪ふみ分し有明に
 唐の書よむ声のひたすら
 名をうつむ寺あちきなく干蕪
 根笹か暮の紅梅の艶
 春の雲唯うち見やる眼のおもき
 夢のまことか衣のほころひ
 朝鳥のいかりか関を啼越て
 鍔ツバを持つ細臈ワカそうき
 濡髻ヌケしほれハ雨後の秋の月
 高灯笼の縄される夜半
 鹿馴て人声につく佐保川原
 鍛冶の酒ゑひ独たハむれ
 かへり花老の命やくらふらん
 家陰の土の乾く冬向
 ほつくと竹割て置つれくに
 また見ぬ聲の心ゆかしき
 紐とけは小督画し薄匂ひ
 とりくおくる緋百合こてまり
 ほと、きすけふハ相逢ふ法の声
 女子髪赤き国の片脇
 つかくと人の持たる物とりて
 御能はしむる今朝のあらまし
 山風の積も柏も吹ちきり
 塩鳥いそく越のこのころ
 月清き伊勢の太夫のかり枕

完山
 暁台
 白居
 月社(8ウ)
 鳳山
 台
 居
 社
 鳳山
 台(9オ)
 居
 社
 鳳山
 台
 居
 社
 鳳山(9ウ)
 居
 社
 鳳山
 台

籬をくゝるさまにくき露
 埋ミおく金のあたりのゑのこ艸
 あやしき童もらひ育る
 針なくて針めを繕る麻衣
 折くころふ戸板むつかし
 よき日とて卵煮て売る花の下
 すみれつみにと出し人もあり

五月雨の巻

さみたれや蚕煩ふ桑の畑
 蚊火けふらする遠よその門
 兀鞞ムツひとりをかしく打負て
 まくり揚ても袖ハ痿ヤたり
 月明て入江の小鮭網すらん
 孤つ雁かね落す家裏
 齒のぬけて梓にも出す露淋し
 握りつめたる小袋の口
 国の北赤枯てたつ境松
 千葉が水の手今も流るゝ
 方丈の涙もろきにあきれぬる
 あどなく羯鼓美ううち
 垂干に色なる月をさしかさし
 木幡の里に紫苑咲たち
 古鶯の羽虱こほす秋の風
 朝水提る親の喪籠り
 幹ミキ懲コセて淡けき花の雨を帯ヒ
 麦青くと岨の猪垣

はせを翁

勿知
 吐龍
 曉台
 知
 龍(11オ)
 風坡
 達比
 龍
 知
 宮(11ウ)
 比
 坡
 龍
 知
 比
 社(10オ)
 台
 山
 鳳
 居
 筆(10ウ)

猿ひきか妻と知りなハとはましを

身のいたつらに刀忘れて

物陰にもものうち侘しつめた飯

内外参りの笠を預り

夕噺の海洋浮の定りて

人わや／＼とはやり正月

箒とる末の女中の上草履

梢しくれし腐り袖の色

喚鐘に静座しらせる南谷

煙と見ゆる伊豆のあら潮

雨気つく月とひやうしに有明し

楚踏ミ何とか秋を感じる

競ひつる神田祭の夢さめて

となたの鐘敷人わけて行

川明て風さへふかぬ日也けり

大腫物をなけく理り

花鳥につけて二月ハ耳早き

柳の扉むら竹の奥

尿前の巻

芭蕉翁

蚤しらミ馬の尿する枕もと

あかつきはやき雨の吹降

芹摘か春の名残や奏すらん

うくひす乱れ人に近くも

野火焚は色なく月のうち霞

唯とや／＼と舟をつり行

仕送りの顔を知られし淀通ひ

宮

台

坡

知〔12才〕

龍

宮

比

坡

知

龍

宮

白居〔12才〕

台

知

龍

宮

居

筆〔13才〕

殊勝の比丘に蚊屋を進_ンせる

養ひもいらぬ茗荷の華咲て

貢ところの篋竹すら／＼

猛_マ／＼し犬うちた、く長か妻

跨きかゝりて水か、み見る

朝風に撰待はしむ松の月

供うしなひし秋をかなしく

白露の小太刀の柄に袖置て

しらへはるけくかはる盤_{シキ}涉

此ゆふへ花の花垣かり初に

枸杞のほろ齋贈られにけり

ぬれ馳_マそろめく春の永雨降

松明くゝる墨_ス股_マの賤

娶せし弟か窓の薄けふり

匍匐鶴によき日和なり

引解て金物洗ふ古具足

うきこのころや酒をとめられ

後の名を高雄の墓に並ふへし

草の嵐のあらし吹去り

骨折の次第に鯨断わけて

片意地つよき宮の別当

かねて聞千句あらんと月に行

槓のはしらのしつかなる秋

萩す、き人のけハひをさし覗き

など仮親の我をつれなく

だふ／＼と橋も夜川の水に浮_キ

葬る牛を昇おろしたり

鳧

寸

鴨

十

居

台

寸〔14才〕

鳧

十

居

鳧

鴨

台

寸〔14才〕

鴨

十

鳧

台

寸

鴨

十

鳧〔15才〕

台

鴨

台

鳧

誰殿の花見を先キのとり袴
扇アビひらめく風のかけるふ

十
筆（15ウ）

投雲

離別の涙魚目に濺ぎ春を武陵のノ北におしまれしは、かのほそ道の筆
はしめのノ吟なり。句情前途千里にあり。其千里をノさす処、この松
島にあり。到てはた、ノ天工の奇を美歎して高吟をとめす。ノされハ
其句情を今こ、にむかへひと巻とノして今時の供養に備る也。

（16オ）

行春の巻

松島風星庵社中

行春や鳥啼魚の眼ハなミタ

魂まつ島に招くかけろふ

梨花の露垣の縄ふし腐るらん

鬣タテガキ刈れは風に飛ふ也

月の秋我に似合の仕へして

榛こほす袖のちひさき

寺持の岡田に瘦し稲の丈

人にわかれて伊賀に分入り

喰裂て錦につゝむ琴の爪

あか星になふ橋のもと

崇なす邪神をなこめつも

荒潮はやミ漁にゆく

月や出る足高に雲薄らきし

窟の僧の無言訪ふ秋

兵の翌の命を露にかけて

芭蕉翁

投雲

白居

暁台

化来

都才（16ウ）

人旨

進左

麻男

土涼

葛父

鹿年

百馬

万郎（17オ）

雑太

櫛笥にふかき情こめつ、

日ハ夕ほのかに花の窓に落

すらく竹を蝶潜るミゆ

春の風野飼の犢のうち戯れ

八日市場へ白まハし出す

中あしき隣をたのむ事ひとつ

染絹氷る人相のかね

ちからなう葉の落て来る冬柏

汲て手向る宇治川の水

五位を経て倒れし家の名を興し

た、いく度も土器の味噌

紅葉折ることをゆるすも風情あり

月のひと夜八月の世の中

鳥放ち又泥亀もはなちけり

難波の京の碑の銘を見る

仮席饗イタヅの使をりくくに

しとろ拍子の鼓きこえて

きのふからけふも小雨に日暮たり

葛籠織出す賤か一ツ戸

丸盆に塩かりて行花の山

日も重りてしづかなる春

四時之吟

仙台

世にすめハ夜も寐られぬ啼千鳥

墓原やこからし石に吹わかる

其けしき国のかさりや雲の峰

春風や立あかる馬の額髪

雁丁

橋三

執筆

雲

居

戈

来（17ウ）

左

旨

涼

父

年

男

郎（18オ）

丁

三

来

雲

台

馬（18ウ）

也寥

一瓠

林鳴

車揮

月の雫払ふて牡丹開けたり
水をかすり蝶行戻る川面や
真直にはしめハ立りいと柳
乱雁の地に落かねて風寒し

鹿門
弋鳴
律鳥
露峰〔19才〕

秋の夜やそこはかどなく物の音
蚊遣立ていつち行けん渡し守
なかれ来て稲株せゝる小鴨かな
露の葉に三日月移る四月哉

春雨
月社
雷後
渭原〔20ウ〕

月もれて品替る夜の寒さ哉

完山

冬川や岩根の蔓に日々夕日

且山

暮行や嵐の中のはなれ鴛

万寸

ぬれ尾花顔うつ道の爪さかり
降る消る其うち雪の白きかな

半自

僧正に従弟持けり扇うり

雄淵

二ツ三ツうたれけり小夜時雨
徐に飛日もありぬ枯尾花

勿知

山もとや嵐きこえて朝しくれ

南平

山吹や八重もひとへの水の色
梅栄て夜明る水の面かな

里幽

あはれ冬壁に夕日の黄也けり

凡射

年頃の榎倒して藤のはな

曉鷹

暮の今朝もしふかなる盛りかな

勿知

田植女に笠かはす市の戻り哉
犬の子の間引菜荒す月夜哉

風坡

春の日やいく度嘶ふ神の馬

吐龍

灸して先立めくる柳かな
ふら／＼と蝶のやとりし稲莖

雄淵

暮の蓮散重りし浮葉哉

北鳳〔19ウ〕

一声や山をちこちのほとゝきす
山道やとほしき花に日の暮る

寛十〔21才〕

○

うるはしや秋の二葉に夕日さす

仞宮

はつ氷日の筋はしる田つら哉
篋纏輪手くて月を見る老女

南平

草中や露にすかりていと、啼

寛十

方徳

有明や鐘もあらハに秋の風

風坡

白羽

うき人や腰かけて居る夕すゝみ

物才

春雨

蒲公英八日和の中の日和かな

知言

方徳

名月や松の葉越の帆かけ船

白羽

方徳

笹原やくらさかたより秋の風

呉鳧

方徳

奥山の桜散てや脊戸の水

雀鴨〔20才〕

凡射〔21ウ〕

○ 夢中吟

浮く蛙この時のこゝろ巨也

万寸

松明に逢て花見し山路かな

雄淵

雨降や谷ほとゝきす声籠る

曾外

わけ登る草の匂ひや夏の雨

栗旦

移ひや裏見る岸のふちの花

栗旦

春雨やその日其夜の人こゝろ

物才

夜頃しらす蛙聞えて空くらし

九十良

並松の長くありたし蟬の声

知言

くたら野に鶴の下リ居る小雨哉
蝶飛やあれたる底のおそろしき
朝の日のしはらく低し霧の海
昼かほや遠くはなれて水の音
○
華のあたり明るく雨の降にけり
鶏頭や宵の嵐の葉にミゆる
夕はれやいくつもひらく杜若
力なや露に身を摺る蚊とんほう
から風やつなぬき売に哀そふ
朝雨や焼野の小松色をふくむ
時雨けり遠近来啼く猿の声
子共等が小宮建けり岡の梅
○
しら菊や何ともなしに代々の秋
莖高に草むらの百合咲にけり
魚提て走り行けり華の陰
時雨来や琴ひき添る茅か軒
先に誰腰かけし艸よかんこ鳥
朝雨や雉子の病ひ羽地をひく
春雨のはれて芥に煙たつ
寒菊や今朝までハ霜の気もつかず
○
昏衣着て衣紋繕ふやはしめの夜
鐘の声おくれし雪の夜明かな
さみたれや動き出したる泊り船
我形の我さへミえぬ雪吹かな

寛十
勿知
石龍
滔江」(22オ)
呉亀
吐龍
俣宮
栗旦
渭原
賢次
つくら
月社」(22ウ)
林鳴
完山
凡射
風坡
勿知
南平
吐形
春雨」(23オ)
車揮
白羽
つくら
栗旦

客人や夜雨涼しき灯の表
唾か子や兄弟なからすまふ取
丁寧の子供等つくるか、し哉
こからしの色たん／＼のはやし哉
千台もとのなかめを移せる東都の
花街今わつかに其名残に触て
葉桜や匂ひは花に遠からす
夜ふかしや禁さかりに雁のこゑ
麦の穂のまはらに見えつ一軒家
はつ時雨江に見んとすれハ江を過ぬ
朝影に眠きまなこや霜の鶴
松杉と時雨尽して峰の月
雨一夜やまふき花を重ねけり
深山路や身に引かけて行時雨
○
土を這ふ菊につほミの猶多し
合歡さくや襪並ふ午時の隙
浅沢や秋のゆふ日になく蛙
春の街囃斎の僧の袖すりぬ
秋たつや姿さたまる蚊屋の中
頬あつし枯野かうへの日の曇り
散梅に月かゝる二十八夜哉
百姓のものトハ見えすけしの花
○
浅沢の中をなかる、清水哉
こからしの吹のこしけり月一ッ
萍や人に譬は、桑門

無前
万寸
知言
曾外」(23ウ)
勿知
北鳳
寛十
汶可
俣宮
露珠
南平
物才」(24オ)
弋鳴
凡射
雀鴨
渭原
九十良
雄淵
万寸
律鳥」(24ウ)
水沢
吐龍
松傘
春雨

はつ嵐夕顔棚の下葉より

物才

深山とも知らて狩入さくら哉

白羽

二三本ひき残したる蕪かな

知言

さみたれや裏返したる舟の底

風坡

風流に飯焚ものか翁の日

伊宮僕 太四郎〔25才〕

翁忌集会

きれくの雲あつまりて夕しくれ

在仙湖東産 勿知

念香

はせを忌やねふつ唱へす魚も喰す

伊宮

○

きざらきハ跡なつかしきはしめ哉

白居

鳴はこそうつと答ふれ鉢叩

全〔25ウ〕

秋の暮の巻

枯枝に鴉のとまりけり秋の暮

芭蕉翁

水なかれ露のほろくくと降

秋来

大広間誰々月に参るらん

林鳴

こゝろ隙なき人しつか也

暁台

團なから芥捨ゆく風脇に

来

あやめそよりと青くさく咲

鳴〔26才〕

蓬生に夜は姑獲ウツメのさたありて

台

かもしつくりか身のうへを侘

来

いまハしの枕なりとて引ほとき

鳴

障子に雪の雀飛つく

台

樵木の枝の房なり打そよき

来

閑人いかに我をしらてや

鳴

哥になやミ死出行けふよ月の雲

台

しのふの葉かけ虫放ちやり

来〔26ウ〕

寂し色の洒落につきし大ふく屋

鳴

穢火たてる他家の昼餉に

台

花にこそきのふより遠の心地すれ

来

日ハうち霞マヤミだ、広くミえ

鳴

蝶につれてうかくと犬に噛れけり

台

聖の一句ア嗟と感しつ、

来

閨の灯へたゝる比のつれなさに

鳴

雨齋院のおもかけを降

台〔27才〕

ほとゝきす鳴や繭搔き初る也

来

茶の酔さませけしのしら花

鳴

鞆打か唐木を鞍にうちかゝり

台

琵琶ひかほとて宿かしてける

来

月かすか木からしの風吹なくなり

鳴

いまや刈らん田上の蕎麦

来

貯ひ置し伊勢の粕漬思ひ出し

台

日の暮前に戻す他の子

鳴〔27ウ〕

浅川に茅の輪ほくして流しやり

台

南かしらに小鷲居ならひ

来

今朝かたの賊とらへさる物かたり

鳴

人も四十をこえてたのもし

台

花をつたふ陽炎空に匂ふらし

鳴

洪鐘の声ゆるむうらゝか

筆〔28才〕

○

風星庵社中

雲日々に山田はなる、二月かな

投雲

岩洩るは鶯すゝる水ならむ

人旨

月に添ふて我魂めくる今宵哉

化来

臍の毛に子牙うこく蘭刈かな
鴨鳴て霰を羽うつ夜明かな
幸ありて疣ウツスヘもとれり更衣

都才
鹿年
土涼
葛父〔28ウ〕

卯の花や道野辺くらき雨の中
月雲をはなる、とミれは時雨けり
鴛一羽動かす去らす日暮けり

万郎
投雲

親の顔に似し人に逢り秋の暮
むら千鳥果は真白く日にかくれ

文洗
麻男

風形に枯野をはしる雉子かな
硯の銘書初る日そほと、きす
枯尾花障れハ飛て光りせり

雁丁
土涼

里くらし枯野か末の猫の声
昏衣着て見歩行麦のむらみとり
狼の子を渡す瀬や冬の月

進左
雑太
鹿年〔29オ〕
化来

室の梅あたなる人の贈りけり
この一夜誰をか待ん月と我

卯笛
投雲

茶の花や夜の明て来る岡の松
雨後の月松の葉氷るひかり哉
牛吼る禁そ冬の夜霧かな

葛父
土涼

五月雨の風情ミたる、や風の暮
飛ほたる行方八月に入ことし
○

石巻連中 〔29ウ〕

冬かれや山の半を飛からす

不国

梅折て美人を送るゆふへ哉

泉良

海苔つミの髪たはね合磯根かな

祇月

ほと、きす我は縁ある寐さめ哉

渡波
峰羽

妻乞や早瀬にかゝるはなれ鹿
其風情さら也萩の夕なかも
咲並ふ蓮に影すむ夜半の月
霞むまで遠山さくら見やりけり

幸雅
岡毛
麻久

磯寺や鐘のあたりを鳴千鳥
蓮散て走り行也水のうへ
名月や野川流る、こほれ萩
市去ッて木の間を走る月をミン

子元〔30オ〕
古宰
峰羽

さミたれに片搗麦のほひ哉
晴けるや雪の夕山江に影す
冬和に蜂の声きく野守かな

不国
魯宝

田ハ青く日毎に畦の細きかな
かれ草の白くミたる、霜夜哉
夏やまや人顔青き笛影

泉良
岡毛
峰羽

○
枯くし木守る霜の熟柿哉
つよかりし身の空蟬や秋の露
初花や物狂ハしき人のさま

呂竹
朱鳥
北川

菊ミたれ狐の古骨に朝の露
いも蔓に角まかる、な蝸牛

東梧
呂竹

○
光陰は矢に似てもとの時雨哉
雪霜の夢立もとる枯野かな
鶉鷓の舌をかりて

通谷
宗之
宗甫〔31オ〕

祖師の遺吟を念仏す
百年のけしきを墳の茂りかな
水鶏啼て樋守が灯消んとす

東山連中
藤沢
東阜
薄衣
松雨

裏門を明はなしたり桃のはな

行先や小高く匂ふ桐の華

たれこめる咳あはれ也雨の花

はつ雪や鶴の髯うつ朝きけん

名月や雨をへたて、照とほし

夕はれや雲這上る夏の峰

梅の花扇の絵ほどひらきけり

走り穂に麦ハ出てあり夜の雨

朝影や江を越して鳴行々子

麦殻をまくれば秋の蛙かな

夜を寒ミ身白き女月下過ッ

水鳥の水際白し薄月夜

忽然と杉のはつれや霜の月

消る時は出けり高灯籠

○

おほろ月瀬曲りて水の白きかな

暁の水流れ蕎麦の花盛

夕風やあら野の末に雉の声

春の雨霞と成りて日暮けり

猪にある、里ハ更たり後の月

なつかしき古沢水や春の月

月はれて岩橋過るしくれ哉

瀧壺の後に鳴やかんこ鳥

○

春の海遠く出る日入日かな

露満て暁しけし栗の音

春の日に雉子の声そ短慮なる

竹寿

莊鳥

大原 玉屑

鶴壑

成章〔31ウ〕

猿沢 守口

松川 万流

松雨

竹寿

莊鳥

東臯

松雨

玉屑

守口〔32オ〕

高清水 閑里

、女 岑布

巖川原 藤里

登米 米丘

閑里

岑布

藤里

米丘〔32ウ〕

一ノ関社中

才良

唱

孤帆

秋の蝶やとまらんとしてハ吹れ行

その色に雲吹うつせ花栲

昼の蛙思ひ出してハ啼風情

春もまた月明らかに寒かな

日の中を吹行色や春の風

青柳の星吹あけてしつまりぬ

行馬や何処の時雨のゆふ雫

池の鴛の空や定めて飛かふる

こからしや夜ハ鎮りて遠く行

○

僧何そ臘八の日のさし登る

月落て花に夜明るそかひ哉

破堂の芥掃出す暑かな

稲つまや吹あつめたる峰の雲

村雲や片山くらき日の紅葉

艸市に牧の童の素脚かな

古城の岩組高し冬木立

朝戸出に霞をむすふ閑伽井哉

風たつや渚へむれ込秋の魚

○

月日経て鶯籠に老を鳴

風たゝに襲ふて秋の行方哉

夜の鶴おほろの湖を鳴あかす

○

はせを忌や首をたれて水の月

山姫の俤見たりふちの花

日々とく四月桃さく替哉

龜玉

八斗

存志

左立

春羅〔33オ〕

春紅

東壁

風姿

雲夢

若柳五月庵連

不來

麦村

素友

調湖〔33ウ〕

守川

乙童

秋台

春艸

ふみ野

佐沼 時雨林庵連

醉石

魯雀

乙人〔34オ〕

岩谷堂社中

柳水

蝶車

白明

幾丁や野川曲りてむら尾花

山来

冷る朝秋海棠のつよみ哉

潜龍

夏の雲山又やまをかさねミゆ

富仙

手にとれハ蟻の手に這ふ牡丹かな

蝶車

月出て夜となりけり桜かり

山来「(34ウ)

剩月も入けり鉢たゝき

白明

飛もの、悲しくみゆれ秋の蝶

白虎

苗代に花流れ入ゆふへ哉

見方

朝露やしらけてミゆる蜘蛛の糸

蝶車

行かゝり松魚買けり夕すゝみ

山来

薺に水ふきかけし寐覚哉

蝶羽

嬉しかりし雪の解るも又うれし

白明

朽穴に小鳥巢籠る柳かな

五童

花とミれば花ともミゆれつくゝし

潜龍「(35オ)

鐘の声もいまや解ぬと春の風

杜曉

はつ雪や土をはなれて莖の上

蝶車

壁落て月もる馬のかしら哉

白明

から風に日の色白し今朝の冬

山来

霧雨や蜘蛛の巣きれて地上飛

富仙

芭蕉忌やとへは問るゝ七部集

調佐

はせを忘や各扇いたゝきぬ

調六「(35ウ)

○

古川連

日詣の二月になりしすかた哉

菟裘

下萌や芥まくれは鶏か寄る

汶柳

雉子の声しはらく有て畔伝ひ

百季

塊に小草芽をもつ春の雨

丁月

棟上の弓矢吹なり春の風

麦雨

退後一步自然に寛しと／いへるにおもひ合せて

山吹やこの水かゝる田三反

大鳥下
画水「(36オ)

○

畑中にたはこの花やわすれ草

一ノ関
方良

切岸のなぐれて川の柳哉

水沢
一イ

雨はげし蝙蝠籠る鐘の中

全
朗秀

日斜に陰も色ます紅葉哉

濯沢
丹丘

小田に身を尽して池の蛙かな

佐沼
東鷲

朝影や笹を出て行蟬の声

一イ

鶯のちよろりと下りる接木哉

高清水
米腹

つくゝと鐘さく侘や夜興引

全
柳路「(36ウ)

雨に風にひとへの芥子のつよき哉

荒谷
露谷

草むらに乱れて低し雨の雁

一イ

日のかしら早稲の匂ひを出にけり

吉岡
雪塘

笠の蠅関の緋百合に飛てけり

長瀬
春枝

ひたゝと馬追ふ夜のミそれかな

一イ

○

朝霧もいく重か除ん光堂

江刺
府台

鹿の音も枯て尾上の松の風

七人
志珍

炭かまの煙めつらし五月晴

七人
志峰「(37オ)

○

増田連

蝶の舞ふ伽藍の中の日あし哉

七人
南榮

夕立のたまるや白のあら木取

栄山

ミたれ髪かする鏡の寒さ哉

達比

塔を見上れハ五重の垂氷哉

麗度

さミたれの風の重りや鋸屑

九江

雪吹たつ野中や松の見えかくれ
 稲つまの雲をはなれぬ月夜かな
 北谷ももれ入月や冬木立
 八重に又七重霞むやはなれ嶋
 きりくす塵三尺の山となり
 露におほれ鳴やみにけん朝の虫
 杉の雪まはらに成てさへけり
 ○
 春の川一筋黒み流れけり
 狐火のひとつハ燃る時雨かな
 六月や鳥も翔らす広川原
 影日向梅にうつりて見えにけり
 追加 中新田連中
 香を探る梅に家見る軒端哉
 月中空におほる吹風
 春すむ頃や車を輾らせて
 簾揚れば酔はさめけり
 世々人ハ昔にかへる哥のさま
 駅路の鈴に雪のあけほの
 市にたつる白に師走の品かはん
 髪のみすきて物なれぬ嫁
 中くに残有齒のうらみなる
 秋を傾く実盛の墳
 おく露の葉うら重る月の影
 折戸まハせば虫の鳴やむ
 蛇の道の人静なり迎駕籠
 医者イハヤの留守居キヤの催主キヤ尋る

北駝 麗度 有台〔37ウ〕 完似 達比 麗度 全
 秀山 暁山 秀山 秀山 榮泉〔38オ〕
 斗入坊 吾友 吾蝶 梅有 浮白〔38ウ〕 玄流 芦英 芦風 有 鼎湖 十尾 物有 青蛟〔39オ〕

明暮の祈ハ絵馬にあらハれて
 思ひつらぬく飯の宿木
 餅うりの今年も爰に花そく
 日長にさらす奈良の洗濯
 陽炎の中にうこめく田螺取
 酒に費る酈シキ生か錢
 言へは似せ侍のあハれなり
 竹の子ぬけハほと、きす啼
 暮敵の寺へ集る五月雨
 桃灯かりて厠求し
 待侘につれなき鐘をかこつらん
 関白殿の恋やをかしき
 殺伐の琴柱にもる、秋の風
 はら、く土に遺る乘イナダバ
 海を照名古屋の月の渺茫と
 舟の世帯の並ふ浦々
 あな尊と爰にも仏おわします
 ひそかに告る君か命日
 操立美女ねたまれつ妬れつ
 未練のきつね犬に追る、
 年を経る花に近江の国の春
 友むつましく結ふ糸ゆふ
 ○
 春雨に暁寒し翠簾の外
 土くれのまゝて召る、若菜哉
 夜桜や人皆去て人の音
 笋の風にうこかぬ太ミかな

東泉 三友 吾蝶 羽蝶 義有 十直 李生 和蝶〔39ウ〕 浮白 李蝶 有 物有 義有 芦風 青蛟 東泉〔40オ〕 芦英 李生 十尾 鼎湖 吾友 梅有〔40ウ〕 吾友 鼎湖 吾蝶 吾友

日やらひをおのか葉てする瓠哉
 能見れば灯籠は皆人の影
 雨や散葉の降宿の夜寒哉
 石更てつめたき風に鐘氷る
 瀧壺の折く乾く時雨かな
 霜満て日向の石の消るかも
 川音ハ吾寒さ也網代守

廻文

咲数は十日咲うと廿日草

雪中会津の山ふミして

梅有

鼎湖

吾友

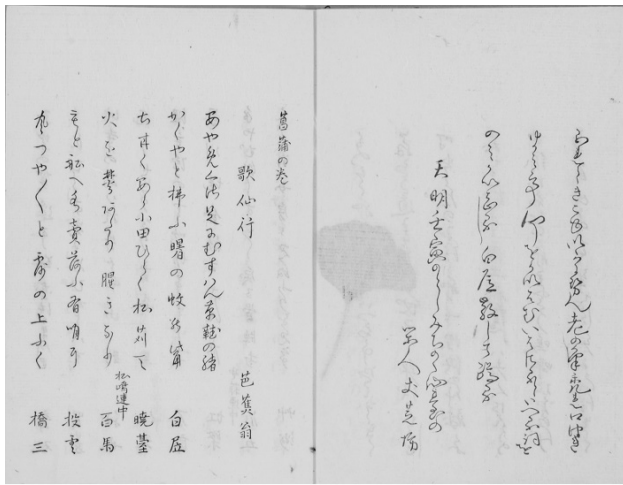
吾蝶」(41オ)

梅有

吾友

百穀

玄流」(41ウ)



『風羅念仏 みちのく』巻一 (京都府京都学・歴史館所蔵) 2ウ・3オ

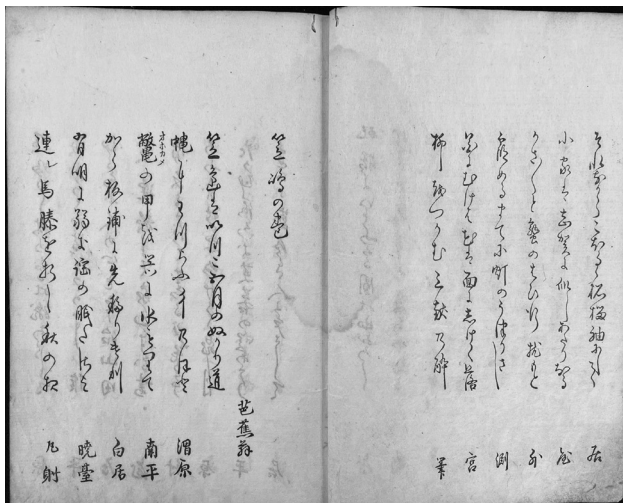
やとりにくるしむ
 人として雪に巣つくるたくひ哉
 幽溪

晧台

山寒し出るより入る日のあした

全」(42オ)

「付記」本稿は、科研費(21K00295)の研究助成の成果の一部である。
 また、公益財団法人三菱財団の研究助成を受けたことにも御礼申
 上げたい。貴重な本の翻刻・掲載をお認めいただいたことにも御礼申
 京都学・歴史館ならびに、渋谷和邦氏に感謝申し上げます。



『風羅念仏 みちのく』巻三 (渋谷和邦氏所蔵) 5ウ・6オ